

# 書評 川本茂雄著「ことばとところ」を読んで

有 沢 俊 太 郎

私は現在「言語表現法」という授業を受け持ち、学生と作文を書いている。書くという作業のなかで、文や文章について考える機会が多い。なんとか自分なりの実践的文論、文章論を得たいと思う。本書もこのような問題意識を背景にして読んだ。

著者は、すぐれた言語学者で変形文法の専門家である。その立場から、言語体系と言語行為の区別、記号の性質（以上Ⅰ部）意味の構造（第Ⅲ部）をめぐる諸問題が平明な文章で説き明かされている。もちろんそこにも重要な指摘が随所にみられる。しかしここでは、すべてをととも扱いきれない。そこで、変形文法という外国産の言語理論を背景に現代日本語論を展開している第Ⅱ部に限定して読んでいくことにする。二つの大切なポイントがある。

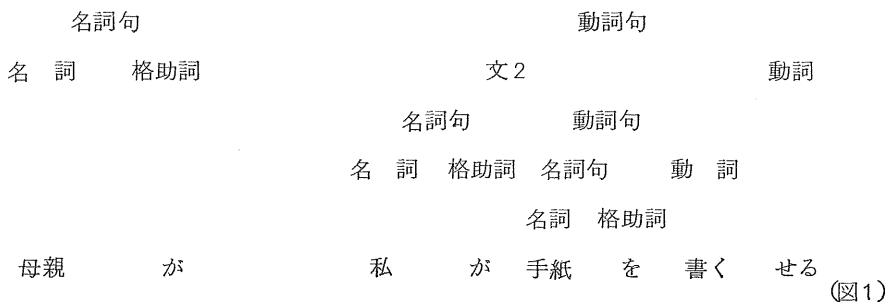
○

まず、名詞句への文の埋め込みの問題。補文構造の検討である。著者は「唄を忘れたカナリヤ」という歌詞の一節を名詞句の例として引用し「唄を忘れた」は深層構造において「カナリヤが歌を忘れた」という文であるという。すると名詞句は「カナリヤが歌を忘れたカナリヤ」となる。「カナリヤ」は共通なので、変形規則によって消去され「歌を忘れたカナリヤ」が出てくるわけである。「歌を忘れたカナリヤは・・・」は「カナリヤが歌を忘れたカナリヤは・・・」なのである。このばあい、助詞「が」がなぜ「は」に変形するのか疑問であるが、後に触れる機会もあるかと思う。いずれにしても「歌を忘れたカナリヤ」は「カナリヤが歌を忘れる」という事実をあらわしているのである。

これをたとえば「忘れえぬ事件」などと比べてみるとよい。「忘れえぬ」は「歌を忘れた」と同様に次の体言にかかっている。しかし「忘れえぬ事件」は「事件が忘れえぬ」のではない。「わたしはその事件を忘れえぬ」という文が埋め込まれているはずである。表面的には同じ形式をしている二つの名詞句は、実は全く異なった過程を経て生成されているのである。

動詞句についても同じように考えることができると著者はいう。「母親が私に手紙を書かせる」（引用文は必ずしも著者のものと同一ではない）という文に書き換え規則を適用し、枝分かれ図に示してみると次の如き図が得られる。

文



使役の助動詞「せる」の前に文2が入ってくるわけである。つまり文は「私が手紙を書く」という補文を内包しているといえる。そして補文は、ある場面において実際に行われる動作それ自体を指し示すことになる。

動詞句のばあい、このような現象は受身の助動詞があらわれるときにも発生する。だから「母親が私に手紙を書かせられる」という文には、二つの補文が埋め込まれていることになる。「私が手紙を書く」という文3と、『母親が「私が手紙を書く」せる』(文2)の二種類の文である。(→図1)

表層の文があらわれる際には、変形が行われる。それは各種の変形規則によって実現されるのである。一つの埋め込み文をもつ図1の文のばあい、まず「が」が「に」に変形する。これも変形規則によるのであるが、本書にはこれについての詳しい言及はない。そこで、井上和子氏「変形文法と日本語・上」(大修館)の該当箇所を参照する。使役文については、主文や補文の主語の性格を検討することに、多くのページが割かれている。しかし助詞の説明は簡単であった。<「が」→「に」変形規則>として[ S XがYがZ ] ([ 1 2 3 4 5 ]) → [ 1 に 3 4 5 ] という公式が与えられているにすぎない。公式の成立過程の説明は必ずしも詳しいものではない。

「書く」→「書か」はどうか。川本氏はこれを音形規則によって説明しようとする。「書くーさせる」は、k a k + s a s e r u と表記される。(k a kは「書く」の語幹を採っているわけである)すると、閉音節となって日本語の音節とはならない。だから開音節にする必要がある。それには後の子音sが脱落せざるをえない。こうしてk a k a s e r uが生成してくるのである。

○

音形規則による変形は一応その理由が了解されるが、助詞の変形の説明はいかにも不十分であった。その説明は、有名な「が」と「は」の問題をめぐる、再び試みられている。

「太郎が花子に本を貸した」の文において、下線部が答えとなる疑問文をつくってみる。すると「誰が花子に本を貸したか」「太郎が誰に本を貸したか」となって、必ず格助詞が使われる。この事実より著者は「事態の論理関係に対応するのは格助詞であって、それは係助詞<は>が充分に果たしうる役目ではない」(1 2 3 ページ)と宣言する。基底にあるのは「が」などの格助詞である。それが何らの事情で変形され「は」を生み出すと考えるのである。

その事情は、一つには情報の新旧ということである。新しく話題になるばあいには「が」が使われるけれども、すでに話題に上っていて古い情報になれば「が」は「は」に変わる。「昔あるところに、おじいさんとおばあさんが住んでいました。おじいさんは、山に柴刈りに…」という昔話の書き出しにおいて「は」と「が」を交換することは不可能である。柴刈りに行くおじいさんについては、読み手はすでに一定の情報が与えられているからである。

しかしこのような理屈を知っていたばかりに、次のような失敗が起きるかもしれない。就職試験で面接に行った佐藤君が、開口一番「私が佐藤です」と言ったとする。ここで格助詞「が」はいかにもまずい。今度は逆に、聞き手の側に佐藤君に対する十分な知識と情報があるばあいに限って、このような発言は許されるのである。佐藤君はそれほど有名な人物であることを自ら認めていることになる。彼は「が」一語によって落第するかもしれないのである。先に述べたことはここでは全

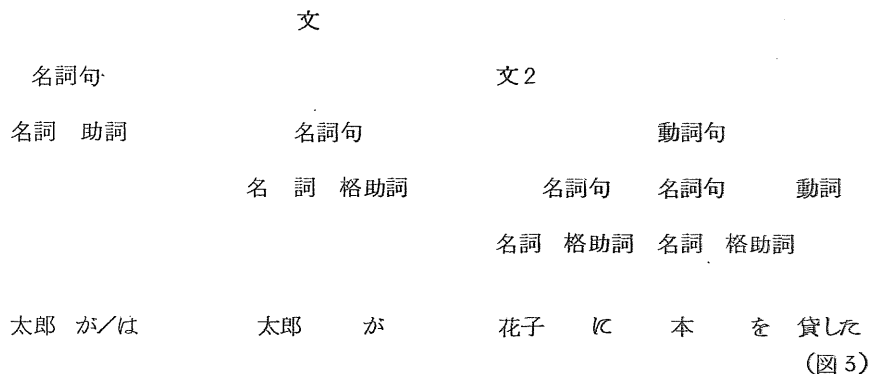
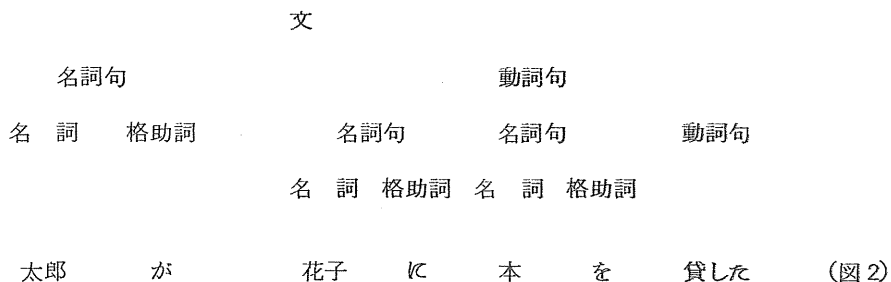
く通用しない。別の見方が必要になってくるのである。

それは「は」がそれを含む名詞句を文の中心からはずすという職能をもつということである。「私が佐藤です」と言ったばあい、「私（が）」に文の中心が集中するのに対して、「私は佐藤です」は、「私」を弱め、単に話題・主題を提示するにとどまるのである。「は」は、「私に<sup>て</sup>いは<sup>す</sup>」という表現に置き換えられる。そして中心は「佐藤です」に置かれ、そこに話し手の判断（陳述）が、話し手の態度、立場と不可分の関係をもってあらわれてくるのである。要するに「は」は文末までを支配下におくのである。（係助詞は一種の係結びの関係を成立させる）

以上、本書で「が」と「は」について述べられていることを、若干敷衍しつつ、まとめてみた。これらの指摘は、どの文法書にも例外なく触れているもので、特に新しいものではない。さらにもっと基本的なことをいえば、「が」は果たしてベースになりうるのかという議論も出てくると思われる。格助詞「が」「の」「に」「を」を兼務する助詞として「は」の職能を考える立場からは、係助詞「は」こそ基礎であるという考え方も成立するであろう。（三上章氏「日本語の論理」）

しかし著書は一貫して「論理的構造を示す文法をまず記述し、それを土台にして心理構造にいつそう近い文法構造を記述する」といった立場を主張する。

「太郎が花子に本を貸した」は、図2のよう



に表されるが、この文の「太郎」を文の中心からはずし、主題化するばあい、名詞句「太郎が」を文の外に出し、もう一つ大きな文を設定することになる。（図3）

そうすることによって①もとの文の「太郎が」は共通だから消去され②外の文の「太郎が／は」は二つの助詞が連続するから「が」は消去されていく。この二つの変形が「太郎は花子に本を貸した」という文を生成させるのだと著者は説く。①については問題がない。しかし②はくもとの文の一部が外に持ち出され、新しい文の成分となるときには、係助詞「は」が採られる>とした方が、さらに明確な説明になると思われる。試みにこの規則を適用して、格助詞を含むその他の名詞句を順次、外に出してみる。すると「花子には太郎が・・・」「本は太郎が花子に・・・」という文が得られる。「は」以外の可能性はない。つまり「は」があらわれるときのみ、これらの文は、日本語の文として成立するのである。

○

おそらくこの変形というものが、変形文法の面白さであると同時に、弱点ともなっているであろう。変形は、ことばの論理的・客観的な面に限って適用されるとき、何ら問題は起らない。それゆえ、共通の語を消去するばあいなど、無理なく変形操作ができる。しかし、同じ要領で助詞、助動詞を公式的な変形規則によって、変形したり消去したりすることには、どうしても割り切れない気持が残るであろう。変形がことばの論理性を頼りに行われるものであればそれだけ、話し手の心理や態度を直接的に具現しているいわゆる「辞」の類の扱い方に、あらためて問題が浮き彫りになってくるのである。

変形文法に対するもう一つの疑念は、文に文を埋め込むという操作である。埋め込み文の数は、現実的には伝達性という観点を入れると限界がある。しかし理論的には無限に埋め込むことが可能なのである。文は終らない。これを文を、形式的に音の切れ目があり、内容的に閉じめのある一まとまりの思想をあらわすと定義する人々からは、当然異論が出てくるものであろう。

しかし、変形文法による日本語の考察は、以上のような問題点を残してはいるが、従来の文法論では処理できない、あるいは処理しにくかった領域を照らし出していることも事実である。教育的視点からは、特にその新しい光は有意義である。文法学習はもちろんのこと、核文を基礎に様々な文を派生させていく方法は、文を書く練習に利用されている。(林四郎氏の試みなど)

「が」と「は」の問題についても、「は」の使用が<外へ持ち出す>ということと密接な関係があることを知れば、次の(イ)(ロ)の文のうちでなぜ(ロ)の方がよい文であるかが納得されるであろう。

(イ) 男たちは突然現われた裸の少年を見て、たいへん驚いた。

(ロ) 男たちは、突然現われた裸の少年を見てたいへん驚いた。(本多勝一氏『日本語の作文技術』より)

(ロ)の文は、主語の後にテンがうってあるという単純な理由でよいのではない。もとの文は「男たちが突然・・・」という文であった。この一部「男たちが」が外へ持ち出されて、「男たちは突然・・・」という文が生成されてきたのである。このように考えれば、「は」の後の読点の存在意義も、容易に理解される。それは、<外へ持ち出す>操作のあかしなのである。

変形文法は、またこのような書くことの実際に有益であるばかりでなく、文章表現を評価する際にもきわめて重要な役割を果たすであろう。外見上からは全く区別できない文も、補文構造の相異

を知ることによって、その文を生み出した作者の認識構造は全く異っている事実が明らかになるであろう。言語外の事態に対する精神の構造が如実に言語表現の深奥に反映されていることを手掛りにして、作者が経験を文に生成していく過程を逆照射することもできる。そしてそれはもちろん文を創造する作者の心を全体的にとらえる試みと無関係ではありえないであろう。

教育の現場で有効な方法は、まだいくつも本書から見出せるであろう。私は、毎週授業を行なう必要性和そこから生まれた関心をもとに、以上のようなことを考えて本書を読んだわけである。最初は、入門書ということで気軽に読んでいたのであるが、こうして書評のようなものを書いてみると、次々と疑問が出てくるのには閉口した。今後、こうした点を少しずつ解決しながら考察を深め、具体的に作文や読みの現場に適用してみたいと思っている。

(「ことばとところ」は岩波新書988, 1976年)

(ありさわ しゅんたろう 文教大学)

#### 編 集 後 記

- ◎「人文科教育研究Ⅳ」をお届け致します。忌憚のない御批判を仰ぎ度いと思ひます。
- ◎本号の巻頭を山梨大学の庵 巖先生の「芦田恵之助研究 序説」によって飾ることができるのは、私共の大きな喜びです。
- ◎前号発刊の折、多くの方々の本誌発行の為の経済的援助をお願いしましたところ、多勢の方から御援助を賜わり恐縮しました。改めて誌上をもってお礼申し上げます。

(編集委員 島村直己, 藤田正春, 望月善次)

以 上

1977年7月1日 発行

編集兼発行人 「人文科教育研究」編集委員会  
東京都文京区大塚3-29-1  
東京教育大学内  
人文科教育研究室気付

印刷・製本 城東印刷社

電話 03 653-6548  
655-3354

頒価 500円